

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00680

研究課題名 英語授業における即興的スピーキング活動によって生徒の英語力は伸びていくのか

研究代表者

阪田 卓洋 (SAKATA, Takahiro)

筑波大学・附属駒場中学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000 円

研究成果の概要：英語授業の中で、即興的なスピーキング活動を継続的に実施した。2人1組のペアになり、教員が提示するトピックに関して、1人1分でスピーチをする。パートナーはその発話を聞きながら、発話語数をメモし、スピーチ終了後に発話者に伝える。2学期間この活動を継続的にを行い、その語数の推移を調査した。結果としては、1学期間（1回目から9回目）では平均語数は44.5語から60.5語に伸び、統計的な有意差が認められた。しかし翌学期（10回目から29回目）では、平均語数に有意差が見られなかった（59.0から60.7）。即興的なスピーキング活動の繰り返しでは、発話語数の伸びに限界がある可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2021年度より実施されている学習指導要領（2017年告示）では、即興的に英語で話すことが重視されている。英語授業の中で即興的スピーキング活動を継続的に実施している学校数が今後増えていくことを考えると、その効果について長期的な実証研究が期待される。本研究の結果、即興的なスピーキング活動の継続により、最初の10回程度で発話語数が顕著に伸びることが分かった。その一方で、その活動の繰り返しでは、一定語数以上は発話語数が伸びていかない可能性も示唆された。さらなる発話語数の伸長には、スピーキングの自動化を促すと同時に、トピックに関する語彙の蓄積や表現形式の学習が必要と言えるかもしれない。

研究分野：英語教育学

キーワード：即興 スピーキング ペア活動 英語授業 発話活動 発話語数

1. 研究の目的

新学習指導要領では、英語の話す力のうち「発表」と「やり取り」が別に定められ、今まで以上に即興性に富んだスピーキング活動を授業に取り入れることが期待される。その一方で、平成 31 年度全国学力・学習状況調査の結果では、「原稿などの準備をすることなく、(即興で)自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒の割合は 26.3%に留まり、まだ日々の授業で即興性の高いやり取りが積極的に導入されているとは言い難い。本校では中学生の早い段階からこのような活動を取り入れており、中学 3 年生ではペアチャットやディスカッションなどを定期的に授業内で実施している(上述の調査結果で、「当てはまる」と答えた本校の生徒の割合は 75.4%)。今後ますます多くの学校が取り入れていくであろうこれらの活動をしている中で気になっている点がある。それは、継続的な発話活動を通して、生徒たちの発話の量と質はどのように伸びていくのか、という点である。これらの実践から、生徒たちの発話量は少しずつ伸びているように感じているが、これは筆者の主観的な感覚であり、客観的な数量なデータではない。また、伸びていたにしても、具体的にどのような英語発話が増えているのかも分かっていない。ここが本研究を始めるに至った動機である。

2. 研究成果

2020 年度は新型コロナウイルスの蔓延に伴い、授業時数が大きく制限され、音声を伴う活動も満足に行うことができなかった。その中でも、授業のなかで帯活動として 1-min chat を継続して実施してきた。ここにその概要と結果を報告する。

(1) 被験者

筑波大学附属駒場高等学校の高校 1 年生 164 名。全 29 回の発話活動に参加したのはこのうち 105 名だったため、その生徒たちの記録のみ分析している)

(2) 実施時期

2020 年 9 月から 11 月(2 学期)の間に 9 回、2021 年 1 月から 2 月(3 学期)の間に 20 回である。

(3) 実験手順

感染症対策として全員分の音声データを集めることが困難であったため、ペアで発話活動を行い、その発話語数をそれぞれの記録用紙に記録させた。以下、手順である。

本日のトピックを生徒がランダムに選ぶ(封筒に入っているトピックシートから複数枚選ぶ)

どのトピックについて話すかをペアで決めて、それぞれが 1 分間話をする。

ペアの相手は話を聞きながら発話語数を数え、終了後に相手に発話語数を伝える。

自身の発話語数を所定の用紙に書き込む。

(4) 分析

発話語数をまとめたシートを回収し、それぞれの学期における発話語数の平均値を出し、そこから全体の平均値を算出する。

(5) 結果

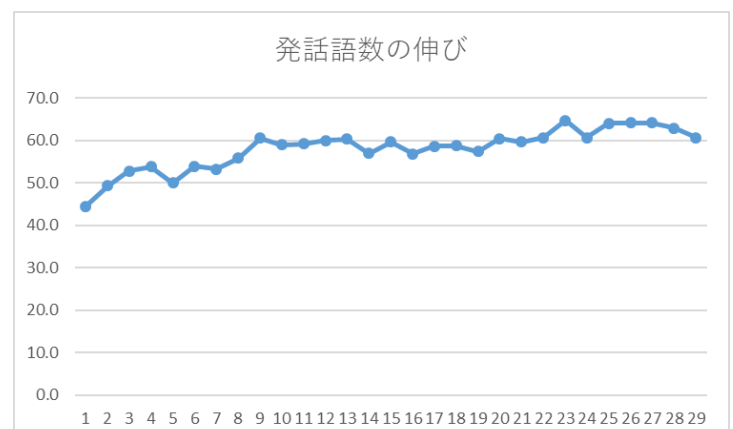
全体の平均値

	2 学期	3 学期
発話語数	52.5	60.5

2 学期の発話語数の平均が 52.5 語だったのに対し、3 学期に実施した活動の平均発話語数は 60.5 語だった。この期間に発話語数が伸びていることが確認できる。対応ありの t 検定(両側)を実施したところ有意差が認められた($t(104)=-7.21$, $p<.01$)。

発話語数の推移

2 学期に行った 9 回、3 学期に行った 20 回の発話活動について、その発話語数の平均値の推移は右図の通りである。1 回から 9 回目までが 2 学期の実践であり、3 学期の実践は 10 回目以降である。2 学期の実践では比較的わかりやすく右肩上がりが見て取れるのに対し、3 学期の実践ではほぼ 60 語あたりで横ばいになっていることが分かる。



(6) 考察

上の結果から、即興的発話活動を継続的に行うことによって生徒の発話語数は伸びていくことがわかった。とりわけ、活動の序盤、1 回目から 10 回目に顕著な伸びがありそうである。

この理由として考えられるのは、即興で話すことへの慣れである。今まで英語を即座に話した経験のない生徒が、その訓練を繰り返すことによって、脳内に蓄積された英語に素早くアクセスし、素早く話すこと慣れたものと思われる。

その一方で、3 学期の実践で思ったよりも発話語数が伸びなかった要因として考えられるのは、慣れはあくまでも慣れであって、本質的なスピーキング能力の変容は起こっていないということだ。即興的な発話活動を繰り返していても、インプットが伴わなければ、頭の中にある英語をただただ早く出すことに終始し、トピックに関連する語彙が増えたり表現が増えたりすることはなく、その結果、発話語数は頭打ちを迎えたものと思われる。

今後の方向性としては、即興的発話活動のあとにモデルアンサーを示してインプットを補完し、再度（その直後ではなくても）同じトピックを扱うことでインプットをアウトプットにつなげるよう働きかけることだろう。インプットとアウトプットの活動を常に繰り返しながら授業を構成することが肝要であろう。

(7) 社会的な意味

昨今英語教育では即興的な発話活動に注目が集まっている。本研究では、その活動が続けることによって生徒の発話語数が増えることが確認された。その一方で、発話語数の伸びは最初の数回が顕著であり、それ以降は頭打ちが続くことも示唆された。授業内で即興的な発話活動を取り入れる際には、アウトプット後に必ずインプットを行うこと、同じトピックで発話を行う機会を複数回用意して、インプットがアウトプットにつながるよう働きかけることが大事であると思われる。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------